

「はじめりは御手の中に」

(マルコ1:1～8)

挽地茂男

2019.11.24 日本基督教団千歳丘教会礼拝

モスクワにあるトレチャコフ美術館の所蔵している絵画の中に、ヴァスネツォフという人の描いた「神言と神の子」という有名な絵がございます。そこには十字架と巻物を手にした神の子のまわりに翼〔羽〕を持った（有翼の）四種類の生き物が描かれています。人間と、獅子（ライオン）と牛と鷲が描かれています。鷲以外もみな翼を持っています。これらの四種類の生き物は、エゼキエル書1章5－14節に出てくる、四つの顔と四つの翼をもつ四つの生き物に由来しています。エゼキエル書1章10－11節にはこう書かれています。「1:10 その顔は人間の顔のようであり、四つとも右に獅子の顔、左に牛の顔、そして四つと



ヴァスネツォフ「神言と神の子」(トレチャコフ美術館蔵)

も後ろには鷲の顔を持っていた。
1:11 顔はそうになっていた。
翼は上に向かって広げられ、二つは互いに触れ合い、ほかの二つは体を覆っていた。」

後に、キリスト教の教父〔主イエスの弟子である十二使徒の後を継いだ教会の指導者たち〕の時代に教父エイレナイオス（〔ギ〕



聖エイレナイオス

（人の顔、獅子の顔、鷲の顔、牡牛の顔）を四福音書の予型であると解釈します。ここから四つの福音書の福音記者のシンボルが生まれてきます。その解釈では、① 人はマタイによる福音書のシンボルとされます。それは

「人」は人間としてのキリストの誕生を示しているからとも、さらに後のラテン語訳ウルガタ聖書の翻訳者である教父ヒエロニムスの解釈では、祖先たちの連綿とした系図、人間たちの系図を経て、キリストが誕生したからとも語られます。次に②獅子（ライオン）はマルコによる福音書のシンボルと

されます。「獅子」は復活におけるキリストを象徴していると解釈されたり、後の教父ヒエロニムスによれば洗礼者ヨハネが荒野でほえる獅子のように、マルコの冒頭で悔い改めの洗礼を受けるようにほえているから、とも説明されます。③牛はルカのシンボルです。

「牛」は犠牲動物の代表的なものであり、ルカでは、キリストの十字架上の死が犠牲として強調されているとも、後には祭司ゼカリアの物語など宗教祭儀に関する記述がルカには多いからとも説明されます。最後に④鷲はヨハネのシンボルです。「鷲」は昇天していくキリストを象徴しているとも言われますし、後にはヨハネの特徴である万物を越える神の言、ロゴス（言）指し示しているとされます。

マルコのシンボルは獅子（ライオン）と申し上げましたが、イタ



サン・マルコ寺院

リアのベネチア〔ベネツィア／ヴェニス、ベニス〕のサン・マルコ寺院の入口のアーチの上には、マルコを象徴する聖書を持つ金色の有翼の〔翼を持つ〕獅子のレリーフが飾られています。中世のヴェネツィア共和国〔7世紀末期（697年）から1797年〕の国旗にもこの金色の獅子が描かれています。マルコがヴェネツィアという都市（国家）の守護聖人なのです。



マルコによる福音書1章1節の「1:1 神の子イエス・キリストの福音の初め」という言葉は、この福音書全体の表題です。この表題のすぐあとに、洗礼者ヨハネ到来の預言が置かれます。2－3節。

「1:2 預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの道を準備させよう。1:3 荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ』」そのとおり」。ヨハネの登場を告げるイザヤの預言です。そ

して4節から、さきほど「荒野でほえる獅子」にたとえられ、先週学んだ祭司ザカリアの子ヨハネが登場します。父ザカリアに与えられた天使ガブリエルの言葉を思い出してみましょう。ルカ1章14-17節。「1:14その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。1:15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、1:16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。1:17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」(ルカ1:14-17)。洗礼者ヨハネの出現は、救いの預言が成就し始めたしるしです。今、救いの歴史が動き出したのです。4-5節。「1:4洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。1:5 ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」

洗礼者ヨハネの宣教活動の場所は「荒野」でした(v.4)。ルカ福音書1章80節は、ヨハネが幼児の時代を経て神が与えた使命に立ち上がるまでの成長についてこう伝えています。「1:80 幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒野にいた。」この洗礼者ヨハネという預言者に「荒野の預言者」という名を与えてもよいでしょう。彼は成長して荒野に入り、そこでの厳しい修業時代を経て、イスラエルの人々の前に登場したのでした。今日の聖書箇所は、ヨハネのいでたちまで報告しています。6節「1:6 ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」。洗礼者ヨハネの生活様式は、まるで**荒野の修行者**のようです。彼はらくだの毛衣を着て、腰に皮帯を巻き、いなごと野蜜を食べていました。世の終わりを意識した禁欲的な生活をしていたのです。



ボッティチェリ「洗礼者ヨハネ」

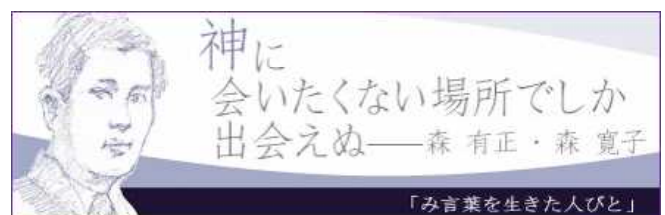
彼は徹底して荒野に生きた人、「荒野に徹した人」だったと言うことが許されるでしょう。

しかし「荒野」から過激な修行だけを連想するとしたら、不十分です。主イエスが度々祈るために「荒野」に退き、その宣教活動の始まりに際して、「荒野の誘惑」に勝利して、心の奥に神が与える深い促しに従って宣教に立っていきました。荒野は神に出会う場なのです。荒野の修行の激しさは全てこのことに焦点を結びます。彼の言葉の強さも（獅子としての強さも荒々しさも）すべてここから出てくるのです。一切の人間的な装飾を排し、いかなる宗教的な美辞麗句も意味をなさない荒野で、ヨハネは、神に出会ったのです。荒野で、真に神と自己とに直面し、そして立ち上がった人として洗礼者ヨハネは、人々の前に登場しました。



先週「アブラハム物語」の準備をしていて興味深い文章に出会いました。森有正の「アブラハムの信仰」という説教

です。森有正は、中渋谷教会の創設者森明牧師の息子、つまり日本の初代文部大臣森有礼の孫に当たる人です。彼は、自身の哲学的な探求のためにパリに渡り、その探求のゆえにパリにとどまり続けて、ついには東大の教授職をも辞して、その探求に身を投じた人です。彼にとってその探求は、自分のアカデミックなキャリアを確実にするための、外遊期間ではなかったのです。探求は探求であり、探究はデカルトやパスカルの探求であり、真理の探究であり、自己の探求であり、神の探求だったのです。彼はこう語ります。「人間というものは、どうしても人に知らせることのできない心の一隅をもっており、醜い考えがあり、また秘密の考えがあり、またひそかな欲望があり、恥がありますし、どうも他人に知らせることのできないある心の一隅というものがあり、そういう場所でアブラハムは神さまにお眼にかかっている。そこでしか



神さまにお眼にかかる場所は人間にはない。人間がだれ憚らずしゃべることのできる、観念や思想や道徳や、そういうところで人間はだれも神さまに会うことは出来ない。人にも言えず親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている。そこでしか人間は神さまに会うことはできない。」人間は神さまに会いたくない場所でしか、神さまに出会えないのです。森有正は自分とアブラハムを重ねて語ります。アブラハムは神の言葉によって、まだ知らぬ土地に向かって旅立ちました。それはアブラハムが「神さまに出会う」という経験から心に深い促しを受けていたからです。「会いたくない場所で神さまに出会っていたからです。森有正にとっ



てアブラハムの信仰の神髄とは、誰にも「知らせることのできない心の一隅」で

神さまにお眼にかかったということ。森有正にとっても信仰の神髄とは、誰にも「知らせることのできない心の一隅」で神さまにお眼にかかったということ。ヨハネに

とっても信仰の神髄とは、誰にも「知らせることのできない心の一隅」で神さまにお眼にかかったということ、と拡大して言うことができるでしょう。パリは森にそれを可能にした場所。荒野はヨハネにそれを可能にした場所だったのでしょ

ヨハネが神とお会いする荒野に、今や、人々がやって来ます。荒野は、人々が神とお目にかかる場所となっていくます。人々はヨハネのメッセージに打たれて、真摯な悔い改めを表明します。5節には、(a) ユダヤの全地方から、そして(b) エルサレムの全住民が、洗礼を受けようとしてヨハネの許に集まったと書かれています。人々の間に大きな精神的覚醒が起こったのです。彼らの行動は、キリスト教の歴史に時々現れるような「一大霊的覚醒運動」の様相を呈しています。人々は続々と、ヨハネの許に来て、罪を告白し、ヨルダン川で洗礼を受けたのです。

しかし荒野は、当時、**頻繁にローマや支配者層に対する反乱決起の場所となっていた**所でもあります。荒野に人が集まる。それは支配者層にとって、反乱の予感を搔

き立てるのです。洗礼者ヨハネが活動した時代状況を、ルカはこのように報告しています（ルカ3:1-2）。「3:1皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、3:2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに降った。」これは単なる歴史の報告ではありません。それは政治的に宗教的にヨハネの身の危険になる要素が山積していたことを知らせているのです。ヨハネの許に群衆が続々と押し寄せる。そのさまに、当時の支配者たちは、内心穏やかではなかったでしょう。〔歴史家のヨセフスは、民衆に対するヨハネの人



洗礼者ヨハネとヘロデ・アンティパス

気を危険視して、領主ヘロデ・アンティパスは彼を捕縛し斬首したと伝えています。『ユダヤ古代誌』XVIII.5.2（18:116-119）。しかしヨハネの

メッセージは、「ローマ帝国を打倒せよ」「大祭司から神殿を解放せよ」ではありませんでした。彼は、神に立ち返ること、悔い改めのバプテスマ〔洗礼〕を受けて罪の赦しに与ることを第一のこととして説いたのです。その同じヨハネの口が、主イエスの到来を預言します。「1:7 …『わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。1:8 わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。』」（v.7-8）。「履物のひもを解く」のは当時典型的な奴隷の仕事でしたから、ヨハネは、自分はその方に対して奴隷以下の存在だと言っているのです。そしてまた彼はその方との違いを「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」（v.8）と語って、聖霊が人々に与えられる時代の到来を預言します。ペンテコステ（聖霊降臨）の先取りです。旧約聖書のエゼキエルはこの新しい時代をさらに先取りしてこう預言しました。「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたが



たの内に授ける」(エゼ36:26a, 口語訳)。パウロはロマ書の8章15節で聖霊を「父

を呼ぶ霊」と説明します。「8:15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、〔神を〕「アッバ、父よ」と呼ぶのです。」洗礼者ヨハネの授けた水のバプテスマは、新しい時代が到来する先触れです。今や、人が神を「アッバ、父よ」と呼ぶ時代が来たのです。ヨハネは、救い主キリストを指差し続けます。

西欧の名画は、キリストと並んで洗礼者ヨハネを描きます。洗礼者ヨハネを描いた名画の中でも「指」に特徴が現れている作品が二つあります。その二つの作品は同時代に描かれています。〔以前(2017年7月)に「洗礼者ヨハネの最期」について説教した時にも紹介しました



が〕有名な「ヨハネの指」の一つは、イタリア・ルネサンスを代表する画家レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「洗礼者聖ヨハネ」〔San Giovanni Battista, 1513-1516年, 69×57cm | 油彩・板 | ルーヴル美術館(パリ)〕の指です。この

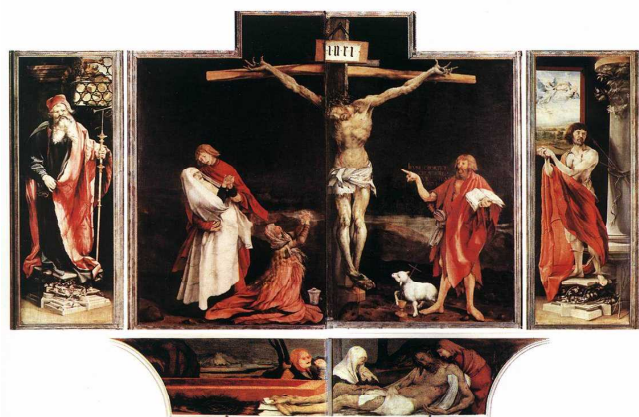


作品は、ダ・ヴィンチが死ぬまで筆を入れ続けた作品と言われています。ダ・ヴィンチの描くヨハネは左手で十字架を抱き、右手の人差し指で天を差しています。絵画の解説者によると、ヨハネが民衆たちに悔い改めを説いている場面で、その指は天を指しており、天におられる父なる神、また天からのキリストの到来を予告している、と説明されます。

もう一つの指は、フランス〔かつてはドイツ〕のアルザス地方の科尔マールという町にあるウンターリンデン美術館に所蔵されている「イーゼンハイムの祭壇画」〔Isenheim Alter, 1512-1515年頃 269×143cm | Oil on panel | Musee d'Unterlinden, Colmar〕

もう一つの指は、フランス〔かつてはドイツ〕のアルザス地方の科尔マールという町にあるウンターリンデン美術館に所蔵されている「イーゼンハイムの祭壇画」〔Isenheim Alter, 1512-1515年頃 269×143cm | Oil on panel | Musee d'Unterlinden, Colmar〕

に描かれた「キリストの磔刑図」
（十字架のキリストの姿を描いた
図）に見られる洗礼者ヨハネの指
です。その指は主イエスの十字架
を指さしています。十字架上で激
しい苦しみに悶えるキリストにこ
そ救いがある、と言わんばかりに、
異様に長い人差し指が苦悶のキリ
ストを指さしています。洗礼者ヨ
ハネは、キリストを証し（備えを）
するために神から遣わされた人物
です。大胆に言ってしまえば、洗
礼者ヨハネの存在自体が「キリス
トを指さす指」なのです。作者はド
イツ・ルネサンスの巨匠グリュ
ーネヴァルトです。祭壇画の中央に
は、〈キリストの磔刑図〉（十字架
の図）が配置されています。茨の
冠が頭に突き刺さり、肋骨の下を
槍で貫かれ、重ね合わされた両足
に容赦なく釘を打たれたイエスの
肉体が、暗い闇を背景に、耐えが



グリューネヴァルト「キリストの磔刑」—イーゼンハイム祭壇画（第1面）

たい苦悩を抱えたまま十字架にか
けられています。十字架上で悶絶
するキリストの姿は、痛々しいほ
どの残虐性と人類が背負う罪深さ
と、そして同時に深い^{きよさ}聖性を表現
しています。画
面の壮絶さ、暗
さ、苛酷な写実
主義と悲痛な情
感の混合は、イ
タリア・ルネサ
ンスの明るさと
は、まったく異
質なもののなの
です。これはおそ
らく、多くの磔
刑図の中でも、
最も忘れがた
く、痛々しく、
そして感動をおぼえずにはいられ
ない、類稀な磔刑（十字架）表現と
して今なお人々の心を打ち続ける
作品だと言われている。



グリューネヴァルト「洗礼者ヨハネ」



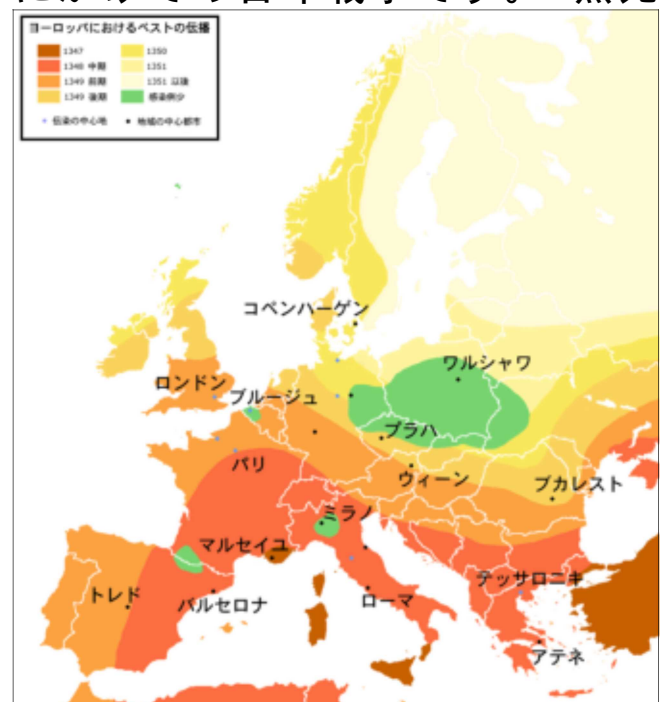
十字架の向かって左側には聖母
マリアと弟子のヨハネが立ち、そ
してマグダラのマリアがひざまづ
いています。悲しみに沈む三人の
姿は本当に痛々しく、ことに白い
衣の聖母マリアは、我が子の死に
接したショックから、すでに気を

失いかけている様子です。一方、十字架の右側には洗礼者ヨハネが立って、キリストが救世主であることを冷静に指し示しています。その異様に長い人差し指が、十字架のキリストを指しています。時間の前後関係から言えば、キリストが磔にあう以前にヨハネは斬首されているのですから、キリスト磔刑図に彼が組み込まれているのは珍しい組み合わせです。つまりそこには、時間を超えた洗礼者ヨハネの本来の役割、つまり「キリストを指し示す者」としての役割が描かれているのです。彼の口元にはラテン語で「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」というヨハネ福音書 3 章 30 節の言葉が書かれています。

この作品はイーゼンハイム近郊のアントニウス修道院のために描かれました。アントニウス修道院もまた、当時の修道院の常で、地域共同体の中心であり、同時に、一種の病院の役割をも果たしていた、と言われます。つまりこの絵は、アントニウス修道院の付属施療院に置かれていたのです。この絵の痛烈な痛々しい表現は、病人の心身にわたる苦痛を、キリスト

の痛みと同化させて昇華することを目的としていた、と解説する評論家もいます。

しかしこの絵にはもっと重要なメッセージが込められています。グリューネヴァルトの時代は、まもなく世の終わりが来るという終末意識が強く働いていた時代です。死への恐怖、救済への願望という心理が全ヨーロッパを覆っていたと言われます。この 16 世紀初頭の終末意識の背景には、14 – 15 世紀のヨーロッパを揺さぶった、いくつかの大惨事が指摘されています。それは 14 世紀のペストの大流行と、14 – 15 世紀にかけての百年戦争です。「黒死



中世ヨーロッパにおけるペストの伝播。ポーランドでは被害が発生しなかった。

病」とも呼ばれるペストは、当時ワクチン等の有効な治療策(薬)もなく、これによって高熱と下痢を発症し、最期には皮膚が黒く変色し多くの人々が命を落としていきました。14世紀中頃(1347-1350年)にかけてヨーロッパ全土に大流行し、当時のヨーロッパ人口の3割(地域によっては5割)が命を落としたとされています。アントニウス修道院の付属施療院からもいくつもの遺体が運び出されたことでしょう。ペストの大流行と並行して、116年間(1337-1453年)も続く戦いが多い人々を戦乱に巻き込んでいきます。いわゆる「百年戦争」〔英仏の対立状態〕と呼ばれるこの戦争は間欠的な戦闘を繰り返し、人々の生命と平和と生活や財産を奪



ハンス・ホルバイン「死の舞踏」1538

い、ヨーロッパ(特に北ヨーロッパ)に回復の希望の立たないような疲弊状態をもたらします。

当時の人々は、人の命がもろく、大風にさらされる木の葉のように、現世でいかなる身分や権力や成功をおさめていようとも、軍人ならば華々しい軍役に与えられた勲章があろうとも、死の前にいかに無力なものであるかを、まざまざと見せつけられることとなったのです。

この頃の美術に、「死の舞踏」や「死骸趣味」(マカーブル)と呼ばれる、死にまつわる図像が広く普及し始めます。14-15世紀の「死の時代」続く16世紀はこの種の図像の制作がピークに達する時期でもあるのです。高い社会的地位を持つものから、社会の底辺に至る人々まで、王宮の宴席で食事をする姿から下々の日常生活に至るまで、様々な生活局面に生きている人間のように参加しそこにうごめき、時には踊り狂う、骸骨や死骸やミイラの姿が描かれま



ミヒャエル・ヴォルゲムート「死の舞踏」1493年(版画)

した。巨匠ハンス・ホルバインの木版画の「死の舞踏」は1524年に下絵が完成した段階で、印刷業者の間で版權を争うほど人々の人気が高く、1538年にリヨンの印刷業者によって41枚の図版でセットで発売され好評を博し、その後何度も版を重ねます。

このような「死骸趣味」は何を物語っているのでしょうか。人々はもう死を恐れなくなり、死の不安から解放された、のではないのです。ある研究者に言わせると、そのような「死骸趣味」の根底にあるのは、まさに死への恐怖や不安そのものなのです。人々は、死を対象化し、まるで死を弄ぶかのように、死を戯画化し、死を茶化し、死を飼い慣らしたかのようです。しかしそれは単に、死の恐怖の裏返しにしか過ぎないのです。疫病、戦争、あるいは飢饉、天災が生み出す恐怖や不安。むしろ、いかに人々が「救済」ということを渴望していたかを示しているのです。

このような時代にグリューネヴァルトも一つの死体(死にゆく体)を描きました。それは踊り狂っている死体でも、宴席で食事をして

いる死体でもありません。生きるべき生涯を終えて、一つの厳粛な死を迎えようとしている体〔正確にはまだ死体ではありません〕です。「死の舞踏」の中の骸骨やミイラが見せる滑稽味とは対照的な厳粛さが漂います。十字架の死の厳粛さは、その死体が生きたその生前を語るための静けさを用意します。洗礼者ヨハネの指はその死体を指さしています。「ここに救いがある。」同時にその指は、その死を通してその死が証しする生(生涯)を指さしているのです。「ここに生きられるべき生命がある。」やがて、16世紀には、ルターやカルヴァンなどの改革者が登場し、真にキリストがその死において指し示している救いを明確にしていく時代、宗教改革を推し進めていく時代がやってきます。

教会は洗礼者ヨハネと同じ使命を担います。洗礼者ヨハネと同じ



く、指としての使命を託されています。教会は、地上のことだけに心を奪われた人々に向かって、神のおられる天を指さします。また洗礼者ヨハネの指は、死の恐怖に確かな人生の指針を失って右往左往する人々に向かって、キリストの死を指さします。すべての人の人生の最後に待つ死がそこにはあると同時に、ヨハネの指さす厳粛なキリストの死は、神の赦しにつながる道を示し、その向こうにイエス・キリストが人々と共に生きた暖かみのある、かつての生命の日々を指します。そして同時に、その生と死をかけた生涯を超えて輝く復活の生命を指さしているのです。

神がこの世界とわたしたち人間を創られました。わたしたちの生命の始まりは、神の御手の中にあります。キリストを信じて神に立ち返るとき人は「新しく生まれる」と言います。わたしたちの魂の新しい始まりも御手の中にあるのです。わたしたちが神と会いたくない場所、精神の屍が横たわるその場所で、魂の荒野で、神にお眼にかかるのです。そこから始まるのです。しかも何度でも。始まりは

常に神の御手の中に備えられているのです。

ヨハネは荒野で悔い改めのメッセージを語りました。それは、人々には厳しいメッセージに聞こえたかもしれませんが。しかしその悔い改めの荒野は、天使の軍勢が現れて、イエス・キリストの誕生をほめ歌う大合唱のステージに変わるのです。新しい1週間のはじまりを主に委ねて祈りましょう。

2019.11.24 日本基督教団千歳丘教会礼拝



1:1 神の子イエス・キリストの福音の初め。

1:2 預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの道を準備させよう。

1:3 荒れ野で叫ぶ者の声がある。
『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」そのとおり、

1:4 洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。

1:5 ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

1:6 ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

1:7 彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。

1:8 わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

1:1 Ἀρχὴ τοῦ εὐαγγελίου Ἰησοῦ Χριστοῦ (υἱοῦ θεοῦ).

1:2 Καθὼς γέγραπται ἐν τῷ Ἠσαΐα τῷ προφήτῃ, Ἴδου ἀποστέλλω τὸν ἄγγελόν μου πρὸ προσώπου σου, ὃς κατασκευάσει τὴν ὁδόν σου.

1:3 φωνὴ βοῶντος ἐν τῇ ἐρήμῳ. Ἐτοιμάσατε τὴν ὁδὸν κυρίου, εὐθείας ποιεῖτε τὰς τρίβους αὐτοῦ,

1:4 ἐγένετο Ἰωάννης (ὁ) βαπτίζων ἐν τῇ ἐρήμῳ καὶ κηρύσσων βάπτισμα μετανοίας εἰς ἄφεσιν ἁμαρτιῶν. 1:5

καὶ ἐξεπορεύετο πρὸς αὐτὸν πᾶσα ἡ Ἰουδαία χώρα καὶ οἱ Ἱεροσολυμίται πάντες, καὶ ἐβαπτίζοντο ὑπ' αὐτοῦ ἐν τῷ Ἰορδάνῃ ποταμῷ,

ἐξομολογούμενοι τὰς ἁμαρτίας αὐτῶν. 1:6 καὶ ἦν ὁ Ἰωάννης ἐνδεδυμένος τρίχας καμήλου καὶ ζώνην δερματίνην περὶ τὴν ὀσφύν αὐτοῦ,

καὶ ἐσθίων ἀκρίδας καὶ μέλι ἀγρίου. 1:7 καὶ ἐκήρυσσεν λέγων, Ἔρχεται ὁ ἰσχυρότερός μου ὀπίσω μου,

οὗ οὐκ εἰμὶ ἱκανὸς κύψας λύσαι τὸν ἱμάντα τῶν ὑποδημάτων αὐτοῦ. 1:8 ἐγὼ ἐβάπτισα ὑμᾶς ὕδατι,

αὐτὸς δὲ βαπτίσει ὑμᾶς ἐν πνεύματι ἁγίῳ.